

Title	土の器/キリストという宝(テーブルディスカッション 発題)
Author(s)	近藤, 愛哉
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 157-162
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5313
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

土の器／キリストという宝

近藤 愛 哉

序

事前に送られて来たこのシンポジウムの案内の中に、「百年先の日本の教会の姿に思いを馳せて、この時代における教会の役割と責任を……語り合う中で」とあった。私たちはこの時代、つまりは「三・一一以後の時代」を生きることを余儀なくされている。十年前、神学校を卒業する間際に教師からかけられた、「これからの日本のキリスト教会の四十年はあなたがた次第ですよ」という言葉が思い出される。一人の小さな働き人にすぎない存在でありながら、同時に、どのように主に仕えるのか、どのような教会を建て上げていくのか、ということが、この国の教会の行く末を決める流れの、確かな一滴でもあることの自覚と責任を促す言葉だったように思う。

確かにこの「三・一一」以後の時代をどのように生きるかということが、「百年先の日本の教会」の在り方を決めるようにも思われる。震災を契機として、被災地のみならず、この日本という国の社会における教会の在り方と、キリスト者の「福音理解」とが、これまで以上に鋭く問われているのではないだろうか。この場所に集った私たちは確かに

「若い」世代かもしれない。しかし、教会に属し、神に献身するキリスト者として、「私たちはまだ若いから」というような言葉で、主から委ねられた「この時代」に対する責任に背を向けてはならないと、実感させられている。

3. 1-1 いわて教会ネットワーク、その働き

私は、岩手県盛岡市にある盛岡聖書バプテスト教会の牧師として震災の時を迎えた。震災直後に、被災教会と地域を支援するために、岩手県内の四教会を中心に発足した「3. 11 いわて教会ネットワーク」の取り組みを紹介したい。

国内外の教会から駆けつけてくださったボランティアの協力を得ながら、岩手県沿岸被災地での支援活動は開始された。しかしそれはあまりにも甚大な被害を前にして、ある種の「無力感」を抱きながらの支援の始まりであり、また私たちが掲げる「福音」に対する自信の揺らぎに直面しながらの支援の始まりだったように思う。この事態の最中、自分たちが抱く「福音」にどのような力があるのか、湧いてくる疑問を必死に抑えながら活動が開始されたことを振り返ることができる。

地震に伴う津波による被害は、岩手県沿岸の「三陸」と呼ばれる南北約二四〇キロメートルに渡る地域に位置する一二の市町村に及び、死者と行方不明者を合わせて約六〇〇〇人という犠牲を生み出していった。「未伝地」と呼ばれる地域が広がり、福音宣教が困難な「不毛地帯」と見なされ続けてきたこの地域には、新しい教会開拓伝道の開始どころか、始められたはずの教会の働きの撤退と教会の閉鎖を繰り返してきた歴史が横たわっていた。宣教団や教会諸団体が、注ぐ労や人材に見合った「実」など生まれ得ない地域として、宣教に取り組むことに二の足を踏み続けてきたような地域と言える。土着の宗教や、容易に「外」からの人が入り込むことを許さない閉じられたコミュニティ、キリスト教に対する偏見や無理解など、そこには確かに福音の前進を阻む、目には見えない厚い壁がそびえていた。約

○・○五%（プロテスタント教会数は八）というクリスチャン人口の統計は、震災による犠牲者のほぼ一〇〇%が未信者の方々であったことを意味していた。

この事実を前に、それらの地域での福音宣教に二の足を踏み、祈ることさえ忘れていたような自らに対する深い悔い改めを迫られると同時に、私たち教会は一つの祈り／願いを共有した。それは、その地域に残された人々の痛みを受けとめ、主の慰めをもたらすべき教会と働き人があまりにも少ない、という現実を前にした時、うめき声のようにこぼれ落ちた「働き手を送ってくださるように……」（マタイ九・三八）という切なる願いだった。神はこの祈りに確かに応えてくださった。これまで三〇人（二〇一四年二月現在）を超える長期の現地スタッフが、「働き手」として次々と岩手県に移住し、諸教会と活動を共有しながら、沿岸六カ所（岩泉、宮古、山田、釜石、大船渡、一関）、内陸二カ所（盛岡、北上）に設けられた拠点を中心とする様々なかたちの被災地支援の働きを続けてきた。今日この場所に集まっている方々と同年代である、二十代、三十代の働き人たちも多数、自分たちの住む場所を離れて岩手に移り住み、共に仕えてくださっている。震災から三年が経とうとしている現在も、ネットワーク内での共働を希望し、新しくスタッフとしてその働きに加わるべく、祈りつつ備えてくださっている方々も複数組控えている。それまで岩手県という地を意識することもなかったような方々が、震災を契機としてその内側を揺さぶられ、人生における大きな決断、移住へと導かれているのだ。さらにその働きは、長期のスタッフだけではなく、「3.11いわて教会ネットワーク」を紹介して、仕えてくださった大勢のボランティアの方々の存在なくして成り立たないものだった。ほぼ毎週のように遣わされて来るボランティアの方々の派遣元の地域は、国内は三五都道府県、国外は二四か国にも及ぶ。

取り組んできた支援活動の内容は多岐に渡る。最初期の避難所での活動や物資配布をはじめとして、約九〇カ所に及ぶ仮設住宅での定期的な活動、みなし仮設、個人宅、病院、小中学校、学童保育、高齢者施設等への訪問、カフェ、コンサート、地域の放射能問題への取り組み、料理、音楽、パッチワーク、英会話等の各種の教室、学習支援、大工作

業、トラウマを負った児童のケア、阪神タイガース・マートン選手とのタイプアップによる「希望のお米プロジェクト」、そして希望者に対する聖書の勉強会など、私たちがしたいことではなく、地域、被災者の方々の必要に応え、支えるための活動に取り組み続けてきた。

現状、今後（二〇〇年）について

震災後三年を迎えようとしている今、これからのどのような体制でその働きを継続していくかということが課題として挙げられている。意識し続けてきたことは、この支援活動が個人や、教会から離れたところにある団体によって続けられていくものではなく、教会の働き、まさに「教会の宣教の業」としてなされていくべきものだという事だ。それが牧師たちや、現地スタッフたちによる「特別な」働きではなく、その地域に立つ、あるいはこれから立てられる「教会」によって続けられていく働きである、という理解と認識の浸透に今後も取り組み続けていく。それは大げさな表現ではなく、歴史上、類を見ないかたちで大きく事が起こり続けていることの認識と、「今、ここで主がなしておられる」ことに教会が参与していくことへの大きな責任を感じているからだ。確かに平日の働きが中心となる支援活動に直接関わる事ができる人は限られているかもしれない。しかし中期・長期の働き人として日々の活動に取り組む方々が、地域教会の祈りの中に覚えられ続け、教会からその「現場」に遣わされ続けているという理解を共有することが求められているのだ。

「不毛の地」とさえ思われた三陸沿岸地域だったが、実はこれまでに教会によって蒔かれ続けてきた福音の「種」が、そこかしこに残されていることにも気づかされている。六十年前にそこで活動をしていた宣教師によって語られた聖書の話を知っている方々や、やはり六十年前に宣教師によって英語を教えるもらっていた、というような関わりを記憶に

留めている方々との出会いが与えられ続けている。今、「福音の種」を蒔くことが求められているだけでなく、既に「蒔かれていた種」が掘り起こされ、目の前に現れることを経験し続けているのだ。まるでそれは、かつて祈りと共にその地で仕えた信仰者たちからの時代を超えた祈りのバトンが差し出されているかのように感じられている。かつて、その「実」を見ることはなくとも、祈りつつそこで人々に仕え続け、涙と共に種を蒔き続けた、名も知らぬ先人たちへの敬意を禁じ得ない。

各地でキリスト教や教会に対する認識が大きく変えられている。大船渡市では、トラウマや震災故の様々な傷を負う児童たちへのケアのため、仮設住宅の支援員から教会への要請を受けるかたちで隔週の「教会学校」が開始された。また昨年末、宮古市では福祉協議会によって「教会ネットワーク」の復興への取り組みに対する表彰が行われた。各地で訪問を続ける先の人々からは、震災によって受けた傷のみならず、人生の中で人の罪ゆえに負う苦難が吐露され、生きることの無情と人生に対する問いが打ち明けられている。教会に対する信頼、キリスト教・聖書に対する期待が生まれ続けているのだ。与えられる人格的な交わりの機会を通して、主の福音が証しされ続けている。そして関わりが与えられる方々の中から、教会を訪れる方々、信仰告白に導かれる方々が起こされ続けている。教会のない地域で絶望の中に希望をもたらすことのできる「福音」を語り続けることのできる教会が生み出されることが求められている。既にある教会が、立てられた地域にあつて、福音を証しし続けることが求められている。

私は、被災地で仕える働き人に求められる「資質」は何かと、しばしば尋ねられてきた。確かに、これまで被災地の働きのために、短期のボランティア、中期・長期のスタッフたちの多種多様な賜物が用いられてきたと言える。彼らはもともと、宣教師、牧師、音楽家、教師、大工、幼児教育の専門家、学生などとして生きてきた人々であり、それぞれの持つ技能も、あらゆる支援活動を通して遺憾なく発揮されてきた。しかし今、他の何よりも福音を分かち合うことのできる「信仰者」であることの意味が一層深まってきていることを感じている。「福音」を内に抱き、揺るがぬ希望

に確信を持つ者であるという「資質」こそが最も求められているのだ。

最後に、つい先日、約二年半の岩手の被災地での働きを終えられた一人の働き人が記した文章を紹介したい。

たくさんの支援団体がある中で、クリスチャンが支援をする意味はどこにあるのでしょうか。……人がすること、人がしてもらうことの限界を思います。その限界を超えた先にある、無くなることのない希望へのとびら、神様との関係を回復することによつて得られるたましいの救いの道を提示することはクリスチャンの特権であることを、ここに来て強く思っています。責任という言い方もできるかもしれませんが、むしろそのことができるのは恵みと思うのです。

三年前、荒廃した地に立ち、福音に対する自信を失いかけた、弱い「土の器」にすぎない私たちだったが、「キリストの福音」こそが希望を与える神の力であることに今、気づかされている。そして置かれた地で、この「福音」に日々生き続け、分かち合い続けることこそがこれまでの二千年間続けられてきた教会のわざであり、百年先にも変わらぬ教会の姿なのだ。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れていっているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。（Ⅱコリント四・七、新改訳）